
恋華歌

茉花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋華歌

【Nコード】

N7245I

【作者名】

茉花

【あらすじ】

予定は未定！！

恋愛小説になる予定です…。

友達と交換で書いてます

はじまり

-
-
-
-

「ジリリリリリン!!」

勢いのある

目覚まし時計の音で目が覚めた。

「ジリリリリリン!!」

「…起きましたって!!」

同じ音を繰り返す機械に
意味もなく返事をしてしまう。

目を擦りながらも、
ゆっくりと立ち上がると、
洗面台へ向かって階段を下る。

やがて、

面倒臭そうに早々顔を洗い終わると、次は家族のいるリビングへ向かった。

「お母さん!!」

私の分の味噌汁はー!?!」

リビングでは、妹の紗輝さきが朝から騒いでいた。

「おつ。おはよう」

紗輝の頭に

ポン。と手を乗せ朝の挨拶をした。

「ちょ!?!…お兄ちゃんどうしたの?!…気持ち悪い」

紗輝は、いつになく

機嫌のよい聡也さとやに、驚きつつ兄の手を払った。

「なんだよ。反抗期かあ?」

「お兄ちゃんのあほう!」

紗輝は朝食をかき込み聡也に向かって「べーっ」と舌を出して慌ただしく朝のしたくにとりかかっていた。

「…ごちそうさまあー」

聡也も朝食を食べ終え、
パジャマから制服へと着替える。

「お兄ちゃん！行くよー？」

「おー。今行くー」

玄関口で叫ぶ紗輝に
急かされ準備をおえた聡也は、玄関へと急いだ。

「「いつてきまーす！」」

聡也の学校は、自宅から歩いて行ける距離にある。
それに引き替え
紗輝の学校は、20分ほど電車に乗らなければならないため、
いつも駅までが兄弟の登校道となっていた。

「ねえお兄ちゃん！」

「ん？どした？」

二人とも鞆と
それぞれの制服を身に纏い
歩いていたところで、

紗輝が声を上げた。

「最近なんかあったー？」

「んー…？なんもないよ」

いつもの道でいつもの会話。

「…つまんなーい」

「なんだよ…何かあったのか？」

「…なにもー…。だからつまんなーいのー」

「…（へんなやつ）」

「おっ…もう駅か。紗輝おまえこっちだろ？」

普段の会話を繰り返すうちに、紗輝の学校へと続く駅についた。

「ん。こっちー…じゃあばいばーい」

「ああ。じゃあな。」

紗輝と分かれ自分の通う
学校への道を急いだ。

不意に時計へ目をやると。

「うああ。やっべえ。」

いつも通りと言えはいつも通りな時間に気づき、鞆を持ち直し走り出す。

「…また遅刻しちまうッ!!」

学校へと続く道を駆け抜ける途中…。

不意に紅葉が目にと、つき足を止めた。

今までこの道を

何回も通ったが

散りゆく紅葉たちを間近で見たのは初めてだった。

「もう秋か…」

と聡也はつぶやいた。

紅葉が雪に変わり冬になる。

年が明けるのはもうすぐだ

そう思うと今まで退屈で平凡だった日々も懐かしく、輝いて見える。

すると紅葉が1枚ひらりと落ちてきた

「…おっ。」

地面に落ちかけたのを綺麗にキャッチした。

「きれいじゃん」

今まで植物に興味なかった聡也も陽に当たって赤く色づいている紅葉はなぜかきれいに思えたらしい。

「もって帰ろう」

ポケットにおれないように紅葉をいれた途端、聡也は、また時計に目をやった。

「うおおっ！！時間ねえ！」

遅刻ギリギリの時間を思いだし全速力で学校に向かう聡也だった。

しばらく走り続けたかいあって
何とか間に合った。

「…あつ！寺田くん！…おはよう！」

「お。…おはよう。」

「なんだよー！聡也またギリギリかよ！」

「さとやああ！v…おはよんにゃん」

いつもの友達と
口々に挨拶を交した。

「さとやあくん！鈴、さとや君が来なくて寂しかったあ…」

まず、

鈴香が大声とともに聡也にとびついた。

…正直。

コイツは苦手だった。

いつも…いわゆる

“ぶりっこ”と言う属性なのらしい。

…いやぶりっこMAXって所か。

「あ…あははー…。」

さりげなく、

鈴香を押し返しつつ

席につくと

隣に座る桜木さんが微笑んだ。

…：そんな些細な事で、内心舞い上がる俺は、最近どうかしていると思う。

あの桜木さんと隣になれただけで死にそうになったのに…。

「おい！聡也！宿題見せろ！」

「またかよ…。少しは自分でやるって気にならないのかよ…。」

聡也の、幸せな気分を
ぶち壊したのは
男友達の隆志^{たかし}だった。

「ほら。これだろ。」

「おう サンキューなっ！」

お目当ての宿題ノートを

手にし、自分の席に座る隆志をみて、溜め息をついた。

「溜め息なんて。何かあったの？寺田くん。」

「えっ……あ。いえ……気にしないで……下さい！何もないですよ！」

「そう？良かった。」

そう言ってまた、微笑む桜木さんにみとれていると。

「さとや君！鈴にゃん見て、今見とれたでしょー！」

また邪魔がはいった。

桜木さんの後ろに座る

あの、ぶりっこMAX女

宮南鈴香だった。

しかもお前なんて目にも付かなかったと、言い返したい気持ちでいっぱいになった。

「いや！…お前なんてみ、見てねーよ！！！！！！」

「嘘つきいん！絶対見てたもん」

「あ…あはは…」

…桜木さんも、苦笑だった。

そりゃそうだ。

「おらー！お前らあ！HR始めるぞー。座れー。」

「みちやくん！今日、鈴にちゃんと一緒に帰ろ？」

一日の授業もあと、
体育を残すのみ…の休み時間に
突然、またアイツが叫んだ。

「…断る…。」

「ええ？ーいやだあ。ホントは鈴にゃんと帰りたくてしかたないんでしょ。」

「いや、…帰りたくなくて仕方ない。」

俺はいつも正確な心情を持って発言しているはずだ。
…なのにコイツの耳は本当についているんだろうか。

「じゃあ。放課後、靴箱んトコね。」

「えあ！？…だから、俺はお前とは帰らな # % …！」

「鈴にゃん、聞こえない！」

宮南は、耳を両手で塞ぎながら言った。

「…はああー。」

いつもこうだ、俺はコイツに流されてばかり、

正直、飽々してるのに！

「あ！…あの、私も、一緒に帰っていい？」

そんな最悪な状況が一変した。

「はい！！もちろん！一緒に帰りましょう。桜木さん！」

聡也の賛成意見に、

鈴香は、むっとした表情に変わった。

「良かった…。」

「鈴にゃん、…イイって言ってないもん〜！」

「えっ…あ。ごめんなさい。」

「いえ！桜木さん、宮南の意見は気にしないでイイですから…！」

「え。…あ、そうなの？」

「…そんなわけな『俺もー！！！！』」

鈴香の言葉に被り、
隆志が言った。

「おう。今日は、にぎやかだな。」

「だろ？…このムードメーカー隆志様のおかげだな！」

俺には、トラブルメーカー
としか聞こえなかったが…、

まあさつきは、
いいタイミングで、割り入ってくれたから、
そこは感謝だな。

皆でワイワイ話しながら
そんなことを考えてると授業開始を告げるチャイムになった。

「今日は体育、野球らしいぜー！」

隆志が上機嫌に話しかけてきた。

「お前はいいよなあ…野球得意だから」

今日は女子も校庭で
体育をしているため、
未央に自分の姿を見られることになる。

「…（桜木さんが応援してくれたらがんばるんだけどな…。」

聡也が静かに願うと、

「さとやくうん！鈴にゃん、応援してるからがんばってえ！」

…お前に応援されたくないっつゝの！

「ははっ宮南に応援されてるぜ！モテるねえ！」

「うつせえ！隆志！」

「おーい、お前らあ！早く守備位置につけ！試合始めるぞ」

立ち話をしていた二人を
先生が終らせた。

「俺たち最初に攻撃か…打順まわってくるまでその辺に座ってよ
ぜ！」

隆志が木陰に座る。

「女子はリレーか」

「何、やっぱ気になんの？誰？宮南か？」

隆志がにやにやしながら聞いてくる。…なんなんだコイツは。

「べ、別にそんなんじゃないやねえ！ついでに、宮南だけはぜってー有り得んー！」

すると鈴香と目が合い

大きく手を振られてしまった。

…恥ずかしい。

「おっ次俺の番か！」

隆志が立ってバッターボックスに立った。

隆志のことなど気にせず未央を探していると

「おらあ寺田！女子の方はつか見てないで野球に集中しろ！」

「…はい」

先生に怒られたのでしぶしぶ隆志のことをみる。

すると……。

《カキイーン》

隆志が打った球は

弧を描くように

外野の後ろに落ちた。

ホームランだった、

それも特大な。

「くそ…あいつの後に打つ俺の気持ちも考えてくれ」

隆志がバットをもって聡也に渡した。

「いいところ見せるチャンスだぜ！頑張れ！」

見渡すと、校庭の端から

未央がこっちを見ていた。

緊張したままバッターボックスに立つ。

「いっ、いっ…」

規則性のある、
機械が放つボールが
飛び出た。

「ーうりゃああー!」

《ビウーン》

大きな音が校庭に響いた。

…それは、バットにボールが当たる音…ではなく。

バットが空気を切る音だった。

「あちゃー! 聡也ドンマイ」

おそろおそろ、未央がいた場所を見つめると。

“くすくすっ”

…笑ってる。

今日も可愛いです！桜木さん！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7245i/>

恋華歌

2011年1月27日13時54分発行